

# きぶのきと

NO.79 月刊

第七輯 人物篇 第十五号  
昭和四十年一月一日 発行 (非売品)  
岡山県都窪郡吉備町東町一三五 宇垣方  
吉備観光協会 呼電四三七番

第72号続

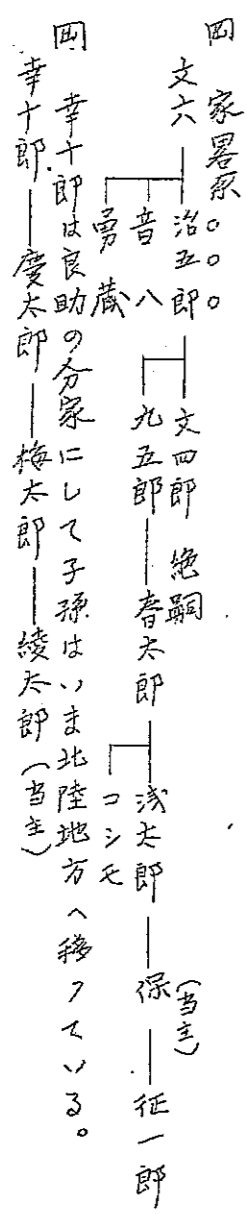
## ○ 自証院日詔上人 (その二)

文政の頃倉敷天領地であつた山田村(いま福田村)で極拳があつた。これは村の在屋岡 次五郎を始め岡 良助、岡 幸十郎、岡 次郎八、笠石岩吉等の數十人の農民が寝ごみを襲われ一網打盡に縛についた、殊数つなぎにされ倉敷の陣屋に連行され代官大草太郎右馬の裁きを受けたとき構にされ放免されたが、右五人は村を指導すべき五人組であつたので最上、折檻の末、江戸送りとなつた。その日笠石岩吉の妻子のみが彼人に護られて桐丸籠で行く五人を真金村の吉備津宮大鳥居の村境まで鬼送り涙ながらにわかれを惜んだが、他のものの家族は人目を耻じて鬼送うなかつたという。岩吉 幸十郎 次郎八は江戸で改宗を誓つたので赦され帰国したが、次五郎と良助の二人はガンとして信念を挫げなかつたので数年間牢獄生活の本、良助は天保二年七月廿八日に、次五郎は同じ歳の八月八月ついに牢死した。

この村に一掃語がある。或暁信者のうちを密かに佛壇を取り出し数人のものが念佛を唱へると、表口に人のけは、かするので、現れてみると右手に刀劍のようなものを持つてゐるので、つぎつぎと追神者と思ひ、あつて佛壇を破りへし、込んだ。這入つてきたのは二尺ほどと長さの曼陀羅の軸物を持つた信者で、お参りにやつてきたことばかり、一回胸をなでおろしたと云ふ。(五人組という別度は在屋、名主とも連帯責任をもつて村中の安寧秩序を保つ役員で、天和三年八月に郷方法度十文條、貞享三年六月に町方三上條の法度が定められてゐる。その内容は倭約の勵行。ばくちや百悪の源。火の用心。つけ火は極悪の大罪。群集無分別の行動禁止。旅宿屋の親切。特に非藩者に注意。神佛崇敬。孝行者もれなく表彰。書買

△ 岡 治五郎の墓は鐘場の岡家の墓地にある。  
一、常間足経 文政十三寅八月八日北岡 次五郎墓 (記録には翌天保二年とあり)  
妙順 文政十亥 五月十日北岡おこの  
この墓は高さ六十五程あり。江戸女らの知らせて建てられたもので、遺骸はないらしい。  
二、全了宗心信士 文政六年正月廿九日 俗名 音八  
春岳良儀信士 弘化二年正月廿六日 俗名 音蔵  
三、寂然院得悟信士 明治三十二年七月廿九日北岡 春太郎 行年四十九才  
深入院妙想信女 大正十二年四月十一日北岡 七代 行年六十九才  
修善院妙悟信女 明治三十四年四月廿六日北岡 コシ又 行年二十一才  
日詔上人の碑ある境内に

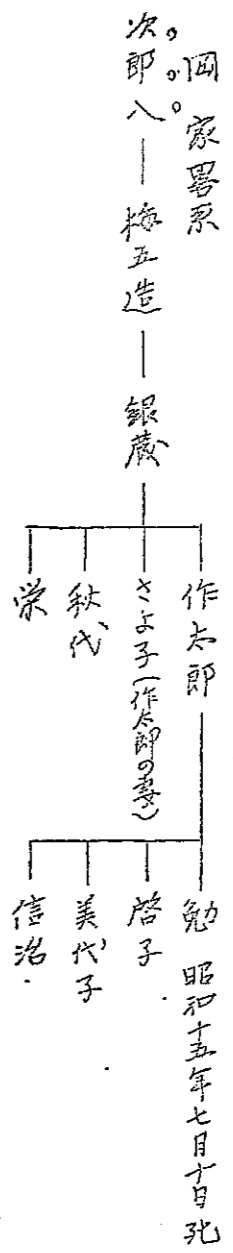
自内院宗種信士 寛政十一年己未八月十一日 俗名 岡 文六



△ 岡 次郎八は過去帳に  
無量院宗舟信士 梅五造 大正六年四月十七日死

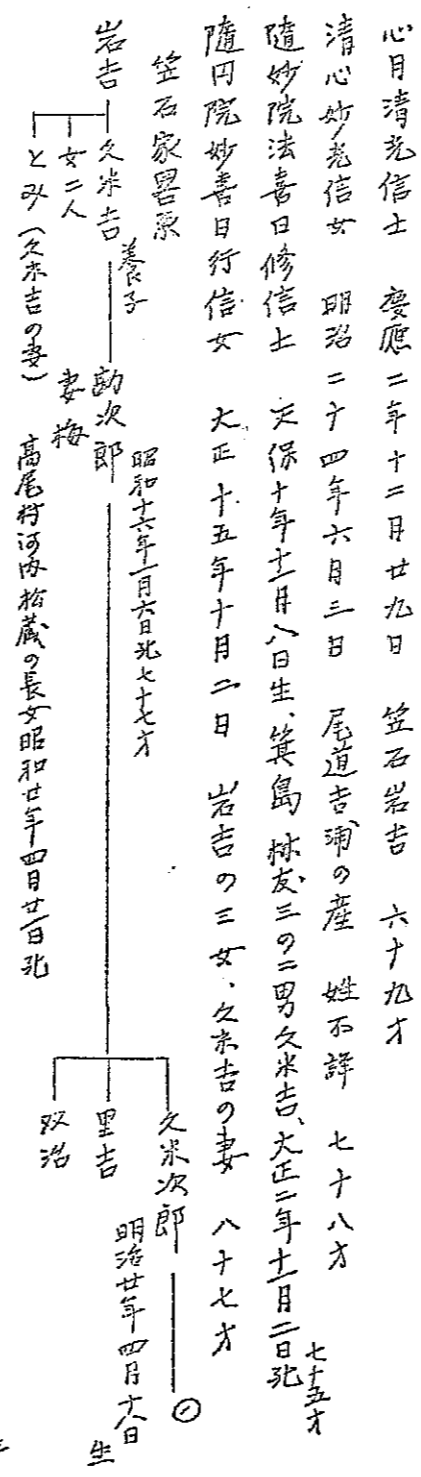
無邊院妙壽信女 昭和四年五月十一日 梅五造の妻 俗名不詳  
 自照院覺月信士 銀藏 昭和廿五年十月廿七日  
 愛蓮院妙香信女 大正十年七月三日 銀藏の妻 俗名不詳

△岡 次郎八の子孫は山田の一ニ四六番地に住レ当主は四代目にして養嗣作太郎である。昭和二十二年十二月一家あげて日蓮正宗に轉向シ妙壽寺の信徒となる。



△岡 良助の血系は明治の末頃まで同村に住してゐたが、子孫は、いま東京に移るといふ。倉敷市成町にて時討商を営んでゐた岡 友春は良助の支流で母説と二人だけの家族であつたが、昭和廿年頃強盗に襲われ、殺害せられたといふ。

△笠石家の位牌に

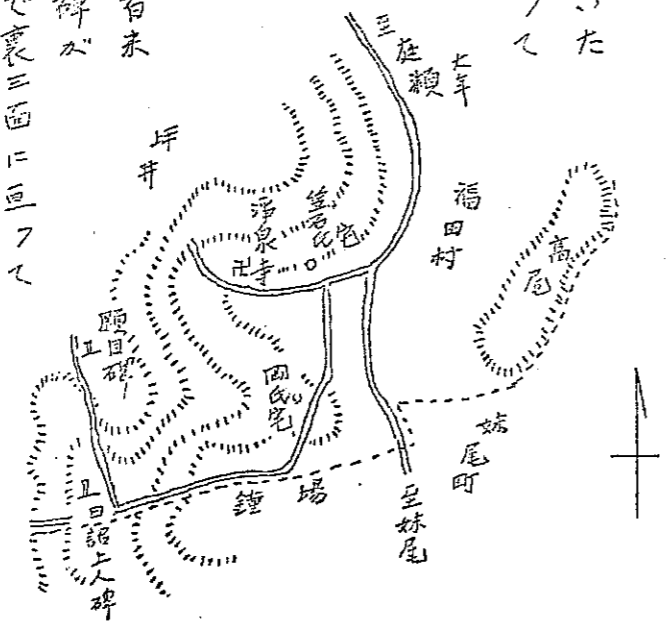


①久米次郎 晃司 山田一ニ五番地に住す

妻 睦野大正五年四月廿日死六十六才  
 入島村白土田繁太郎の長女  
 后妻きくの 昭和三年四月廿日死六十八才  
 正保銀治郎の二女

△不登不施源は二百十年の長い間禁制になつてゐた

が、御碑即ち古泉村出身の日正上人の請願によつて明治九年四月十日布教が許可せられたから毎年春季には御碑即ち地方から日詔上人の墓に参詣のため多数の信者がきて、岡清太郎の宅に休憩するといふ。岡家は明治三十三年に春太郎がなくなつてから同派を脱して山田の淨泉寺の檀家になつた。



日詔上人の碑の裏から右側の山道を辿つて三百米ほどのぼると、路傍の右側に同形同質の頭目石碑がある。年号はみえないが山田議中の建てたもので裏面に書いて

「我等過去現在未來の六道の苦を受けけるは偏に法花経誹謗の罪也汝人とし生れて百惡身に備はる根本は法花経誹謗の罪也汝人には三従と云つて誹謗する時は親に(畧)南無妙法蓮華經を唱へ奉れば未來凶佛疑いなレ(畧)云々と刻んでゐる。

△備前備中地域には不登不施禁制に違つて多くの殉難者を出してゐることは前述したが大体に熱心な遵奉者が多く、その布教は日像上人の高僧大覚大僧正の巡錫に源を

くものである。(第五輯題目石碑篇参照)慶長四年八月に京都の妙覚寺の日叟上人が岡山の蓮昌寺の岡堂供養の請いによつて下向し、また同十七年対馬の流罪が赦免され上洛の時に牛窓に立寄り、この時蓮昌寺の日叟、日魏西上人と自南怒慶法印が慶応し、三度目の元和五年には巡教のため未備している。慶長八年四月に日詔上人が日叟上人に送つた書翰の一節に「前略 就中備前の佛法強固の間 御心安ずべく候 法印監物の深信感入る討りに候(中略) 恐々謹言 仰月十六日 本門寺 日詔 花押」とあり。日叟上人が備前の教界に盡力してゐたことが判明する。文中の監物とはもと備前国主宇喜多秀家の家臣で朝鮮征伐に従軍した楠村監物宗理である。また志きに書いた自南怒慶法印も同じ宇喜多氏の道臣である。

現在蓮昌寺は身延の末寺であるが、もとは京都の妙覚寺の系列下の不受不施派に属してゐたことがある。

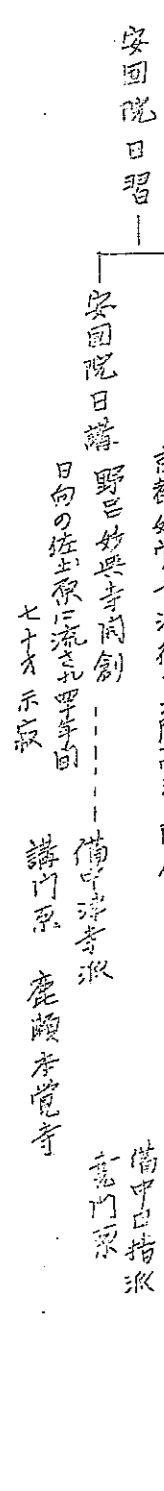
(池上本門寺は日蓮宗大本山長栄山大國院本門寺といひ、東海道線大森駅から三十余町の距離にある。語るまでもなく宗祖日蓮上人の入寂の地である。上人は貫名次郎重忠の子として貞応元年三月十六日安房の山邊に生れた。幼少を藤原丸といひ、十二才にして初めて清澄山に入りて佛道を研修し法華題目を唱へて他宗を攻撃したので、幕府や他宗の壓迫を受け流罪に處せられた。など、あらゆる苦難にも屈することなく、ただ一筋に信仰の焔は益々熱を加えた。或は辻説法に妙法のありがたきを説き甲斐の國の身延山に久遠寺を開いたが、後ばくもなく池上右エ門大夫宗仲の屋敷に入りて弘安五年十月十三日に示寂したのである)。

△不受不施には妙覚寺派と本覚寺派とがある。その分派にまつて述べる。戸川氏が撫川旗下に下まつた天和年中(一六二一—一六三三)備中の不受不施の僧徒は津寺と

日指の二派派にわけられてゐたが、適々孝季及びその修行のことから隙を生じた。日指派は外受必心不受を主張し、讃岐に死流中の日菟、日了兩上人を戴き、津寺派は内外透徹挺身を強く主張し、岡山の蓮昌寺の英雄院日相上人をかついで兩派互に争ひ、ついに貞享二年になつてその解決策を日向に謫居中の日指上人に請うた。日指上人は日指派を説得し津寺派と和を講ぜんとしたが、日指派は頑として聞き入れなかつたので日指上人はこれを破門した。よつて日指派を表門派(日菟系)或は豊福派と呼び、今の金川の妙覚寺の流れである。明治九年四月十日日正上人が再興して根元道場になつた。妙覚寺はもと龍華教院といつたのを改稱したのである。これは寛永七年六月徳川幕府が京都の妙覚寺を日正上人に興へた時、不受不施派の徒の盟約書に「時節到来あるに於ては一箇四面の草庵にても取立て妙覚寺を再興し云々によるものである。津寺派は日指上人を師と仰ぎ講師派或は講門派と稱した。この流れが明治十五年三月十日日心上人によつて再興した鹿瀬の講門派本山本覚である。もとは龍華教院といつていたのである。

以上のようにより不受不施派はその主流が講、禿、ブルにあるにせよ三百余年の岡宗門の主識が備中の内に脈絡として傳わり、再興の基盤になつてゐる事實は見逃すことの出来ないことである。

分派系統



○ 太田箴三郎翁

翁は安政六年に中樺川福富の農家に生れた。若い時から謎みけに天戈的の知能を有レ謎みけの大家として地方的に知られてゐた。師の教授を受けしもの多く秋の祭礼などには車樂(だんじり)の前に坐り祝いの家に中くと、その屋号や姓名を謎にかけて霎時の間に解いて入々を喜ばれたという。一例として「口をあけて東を望む」とか「かけてなにととく」四山へ行くのに花尻を廻つてゆく」ととく。その心は「野殿(のど)のみみえる。今でいへば差レ当リラジオへ出演する「トンチ教室」の優秀な生徒の一人であらう。幼歳の祭礼に觀音堂の横畑福壽堂の前で

横畑菓子屋さんとかけて、騎兵の大演習ととく。その心はうまうまが多いではないか。また一町八段十二段、鍛冶屋の娘さんの社先とかけて。昔京都の有名な鍛冶ととく。心は、三條小鍛冶宗親。東町の富山大平治さんの宅前で、富山さんとかけて、侍ととく、その心は杖書(たけが)で食うている。中田の街筋とかけて、六尺禪ととく、その心は、汚なくて長い。(昔は家並が揃つておらず、道路がききたなかつたようである)。謎を解く時には、采とソフて一束はみりの竹先に長さ八十程ほどの劔先形に切つた紙片を十枚包み合せて根元を紐り、それを左右に振りながら行うのである。この采は近年まで太田家に保存されてゐたが、いまは失なわれてゐる。箴三郎翁は招かれて桑名、岐阜地方まで出向つてゐたという。また池や川などの堤防を修築する時、招かれて土砂の選別をしてゐたという。其筋にも才能を持つてゐた人である。

翁は昭和四年八月十四日七十一歳で死去し、妻は同十八年二月四日七十九歳で他界した。夫婦とも長身を全うしたか子福に恵まれるが、ひとり娘の花子は左村の常坂、赤木勘平に嫁ぎ正嗣をなかつたので、勘平の間に出来た多喜夫に太田家の跡目と継がせ、福富五十九番地に新家屋を建築して晩年は安樂な生涯を送つたのである。太田家の墓地は信濃寺内(あり夫婦の法名は

至芸院常樂信士	昭和四年八月十四日没	七十有一歳	(箴三郎)
常樂院妙閑信女	昭和十八年二月四日没	七十有九歳	(妻某)

太田家墓系  
 多喜夫と白家を相續す  
 寛 大東亞戦争に戦死す

○ 燈渡藤一郎

藤一郎は諱を高明、号を松山という。安政元年二月四日樺川五。番屋敷に生れた。屋号を瀬口屋と呼び、先祖は左村の瀬口の出である。幼少の頃から學問を好み、七養水堂等と共に山地の大銅松窓のもとに通ひ漢學を修めた。明治十年、二十四歳で小学校の教師となり同廿六年には推されて樺川村の首長となつた。後ちに都立師範會館員に選ばれ同廿七年六月所制が布かれて再び町長に推挙された。日露戦役の際はその功績によつて勲七等に叙せられ青色桐葉章を賜つた。

晩年には公暇を辞して凡月に樂み、傍ら多くの子弟を教養してゐたが、大正四年三月廿五日痲瘋に犯され六十二歳でこの世を去つたのである。

藤一郎には男子もなく娘の日出子に三須村の鬼玉某の子、壽を答けて養嗣し、三男二女をもうけた。当主は長男にして太郎といふ同所に住してゐる。

(藤三郎 寺院篇 觀音院の項参照)

